

平成 22 年度教育学部プロジェクト推進支援事業報告書

1 プロジェクト名

「学部と附属学校、地域との連携による体育の授業改善～「体力向上ハンドブック」を柱として～」

2 プロジェクトの担当

代 表 者 清水茂幸

附属小学校 根木地淳 松村毅 菅原純也

附属中学校 菅原圭 加賀智子

3 プロジェクト協力団体

盛岡体育学習会（代表 菅原 純也 岩手大学教育学部附属小学校）

花巻体育学習会（代表 山内 弘文 花巻市立若葉小学校）

奥州体育学習会（代表 鈴木 雅孝 奥州市立水沢小学校）

一関体育学習会（代表 千葉 勝博 一関市立猿沢小学校）

県北体育学習会（代表 盛島 寛 九戸村立江刺家小学校）

岩泉体育学習会（代表 山本 繁 岩泉町立二升石小学校）

葛巻体育学習会（代表 八重樫元亨 葛巻町立五日市小学校）

4 プロジェクトの目的

○学部と附属学校が指導法の開発をおこない、附属校で授業実践をして得た成果を地域と連携しながら岩手県内の先生方に広く伝えていくこと。

○各地域にある体育学習会と連携を深め研究成果を提供していくこと。

○プロジェクトで得た成果をDVDに編集し、各地区の体育学習会や教育委員会を通して広げていくこと。

5 実施計画

5月 学部とのカンファレンス

6月 附属小中学校公開研究会

7月 ハンドブックDVD編成委員会

9月 各地区体育学習会交流大会

10月 授業公開研究会（附属小）

11月 ハンドブックDVD編成委員会

2月 ハンドブックDVD完成 各地区への配布

6 取り組み状況

(1) 岩手体育学習会集会の開催

期 日 平成 22 年 9 月 25 日

内 容 タグラグビー講習会（講師 紫波町立赤沢小学校 佐藤剛先生）

各地区体育学習会の実践報告・情報交流（活動の紹介。成果と課題など）

参加者 26名

成 果 ・タグラグビーの指導について学ぶことができた。このことにより、授業の充実が図られた。
・各地区の情報交換をすることにより、お互いのよさを学び充実した会運営につながった。
・各地区の課題を全員で議論することにより、解決に近づくことができた。

(2) 授業研究会の開催

期 日 平成 22 年 10 月 30 日(土)

内 容 授業研究会 6 年いちょう組 単元名「わかたけGP (体づくり)」授業者 菅原純也
模擬授業検討会 「体づくりについての模擬授業と検討会」

成 果 ・休日にもかかわらず、県外を含め 30 名の参加があった。ニーズに応じていけば、休日開催でも十分研究会は行うことができる。

・授業研究会では、日頃から感じている「体づくり」の授業の作り方について議論することができた。提案性のある授業になった。

・体づくりについて、授業への組み込み方を提案することができた。また、よりよい授業になるために、参加者と協議しながら授業作りを行った。

課 題 ・附属小学校まで出向いてこれられない先生方に対して、こちらから出向いて授業を提供する必要がある。ライブでこそ学べることがある。

(3) 「体力向上ハンドブック」を柱とした、「体づくり」領域のDVDの作成

内 容 体力向上ハンドブックの「体づくり」について映像化した物をDVDとして作成した。

各地区体育学習会に分担し、協力して作成。

○DVD の概要

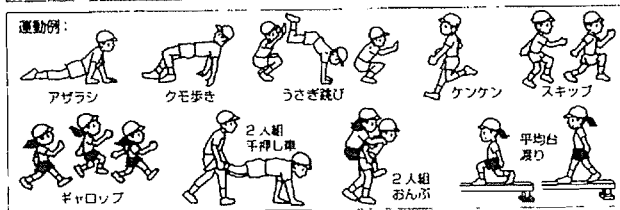
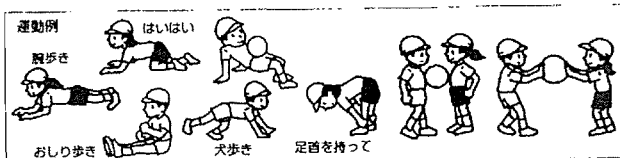
A 体づくり運動

(第 1・2 学年)

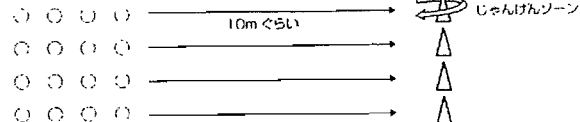
[多様な動きをつくる運動遊び]

1 折り返しの運動遊び (体を移動する運動遊び、用具を操作する運動遊び)

- (1) 横線に広がり、片道 10m ほどを以下のような運動で進み、コーンのところで折り返し、走って戻ってきて次の人と交代する。正確に行うことを意識させることが大切。
- (2) 慣れてきたら、じゃんけんを取り入れ、コーンの所で隣の人とじゃんけんをする。負けたら、カエルの足うちや壁より逆立ちなどをしてから戻ってくるようにアレンジすると良い。



場の工夫



2 オセロゲーム (体を移動する運動遊び)

- (1) 自分のチームカラーのカードにひっくり返していくゲーム
- (2) 制限時間内に多く変えたチームの勝ち。
- (3) 動物歩きで、走って、ケンケンでスキップでなど移動の仕方を変えることでアレンジできる。



1・2 年

内容の概要

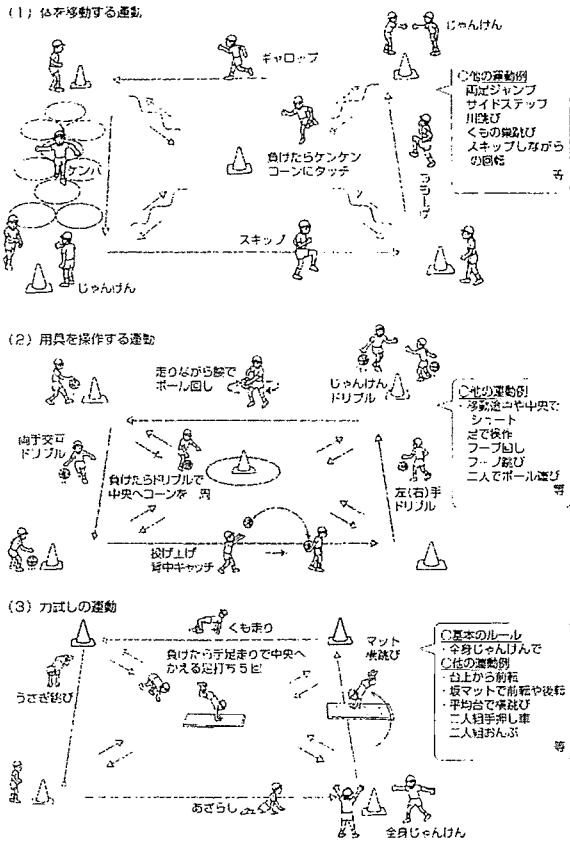
1・2 年生は、多様な動きを作る運動遊びとして、基礎となる動き (左図) を紹介した。また、これらを使った折り返しのリレーなどの競い合う運動遊びも紹介している。

そのほかに、オセロゲームや陣取り遊びなども動き方やルールなどが分かるような映像を用い構成している。



研究協力者

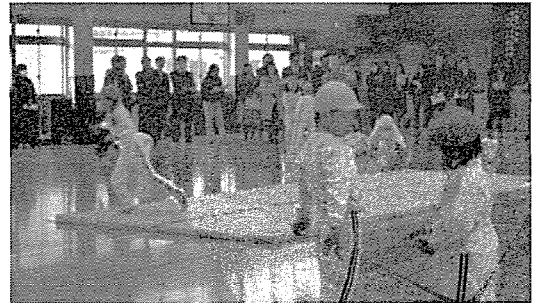
葛巻町立五日市小学校 八重樫元亨
盛岡市立緑が丘小学校 細田多聞
附属小 松村 菅原



3・4年

内容の概要

3・4年生の中心教材は、じゃんけん双六にした。左図のように、様々な活用方法があるので、じゃんけん双六をもとにした複数の運動を提示した。ジャンケン双六は、準備物も少なくルールもシンプルなすぐれた教材である。



研究協力者

岩泉町立釜津田小学校 川村実
 九戸町立長興寺小学校 畠山奈緒子
 附属小 根木地

【第5・6学年】

【体ほぐしの運動】

○チャレンジ運動

仲間同士で助け合ったり依存したりしながら、集団的達成の喜びを生み出すことをねらいとしている。また、活動を通して仲間とかかわる楽しさを体験することができるとともに、仲間のよさを認め合うことができる。

- 基本のルール
- ・チームメイトを名前やニックネームで呼ぶ。(名字で呼んではいけない)
 - ・目標をクリアするための方法をチーム全員で考える。
 - ・グループの全員で結束し合い、助け合って活動する。
 - ・チームメイトにプレッシャーをかけたり責めたりしてはいけない。
 - ・活動中や活動後はチームメイトに励ましや賞賛の言葉をかける。
 - ・「いいぞ!」「その調子!」「せーのっ!」「上手い!」「よくやった!」「すごい!」等。
 - ・目標をクリアできたら、チームメイトのよかったところを評価し合う。
- *これらのルールを一つでも破れば、はじめからチャレンジをやり直す。

(2) ザロック

岩に5・6人のメンバー全員で乗り、5秒間バランスをとることができればクリア。

岩は跳び箱や台、傘などを、後ろ、大きさは最小30cm四方、人数に合わせて、

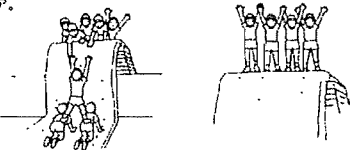


1,2, 5と数えると差すぎる。101, 102, 105と数えるとよい。

(3) 壁のぼり

ステージ上に跳び箱8段を横向きで2台並べ、マットをかぶせて壁をつくる。メンバー全員が壁にのぼることができればクリア。

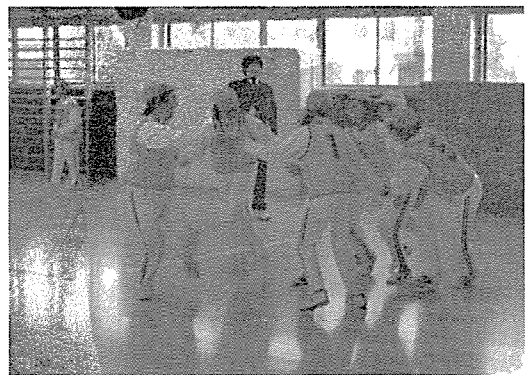
安全上、フジアにもマットを敷く。マットのたすきを持ってはいけない。



5・6年生

内容の概要

前半は体ほぐしで、チャレンジ運動を紹介している。チャレンジ運動は、仲間づくりやコミュニケーションの育成に優れた教材である。後半の体づくりでは、運動強度が高く短時間で体力の向上が図れる教材について紹介している。



作成協力者

花巻市立若葉小学校 山内弘文
 附属小 菅原

(4) 体育学習会の様子(岩手大学ユニオンとの共同開催)

期 日 平成 22 年 11 月 28 日

内 容 「ネット型教材の可能性を探る」(講師 NPOテニスチャレンジ岩手 四戸健太郎さん
岩手大学人文社会科学部教授 浅沼道成先生)

- 成 果
- ・ネット型は大いなる可能性を秘めた領域である。ゲームはシンプルな構造。小学校であれば、ハンドテニスで行ったり、ブレルボールの導入やタスクゲームに用いたりすることもできる。
 - ・「円の色を変えて相手に言われたほうの色の円に入れるとボーナス」や「円以外のスペースをねらう」などの工夫が考えられる。
 - ・テニスを通してネット型の動き方や相手コートへの狙い方も学ぶことができた。これは、「ボールへの動き方」で分類した新指導要領のよさである。テニスを学べばバレーもうまく動くことができる。
 - ・これからは、種目を学ぶのではなく「本質的動き」は何かをシンプルにとらえ、それを他の同じ型の種目に結び付けられないか考える契機となった。

7 成果と課題

成果

- ①各地区の体育学習会とのネットワークの構築
- ②体力向上ハンドブックを用いた単元開発・授業改善
- ③体力向上ハンドブックを用いた指導の充実を図るためのDVDの作成

課題

- ①授業作り(ハンドブックの内容をいかに授業としてデザインするか)
- ②「体づくり」以外の領域への広がり
- ③地域へ出向いての授業の提供

その他(資料)

(1) 岩手体育学習会集会の開催

岩手体育学習会

岩手県内7つの体育研究サークルが、一同に会して学び合うという画期的な集いを、この秋、岩手大学教育学部附属小学校で熱く開催します!

「未来を拓く体育実践の道が見える」この集いに、ぜひ参加ください。

なにをするの?

◎実技講習会

紫波町立赤沢小学校 教諭 佐藤 剛 「タグラグビーの指導について」

◎実践の交流

各サークルの活動報告・授業提起(各サークル15分程度)

【日程】

	12:30	13:00	14:30	16:30	18:00
	受付	実技講習会	サークル紹介交流	移動	交流会

いつ、どこでやるの?

日時: 2010年9月25日(土)

会場: 岩手大学教育学部附属小学校 体育館

※当日は車で来校ができますが、校舎裏側に20台ほどの駐車スペースしかありません。乗り合わせて来校していただけますよう、よろしくお願い致します。

問い合わせ先

↓↓

岩手大学教育学部

附属小学校

菅原 純也

tel

019-623-7275

第149回 盛岡体育学習会通信

第2010.9.26. 5代世話人 附属小 菅原

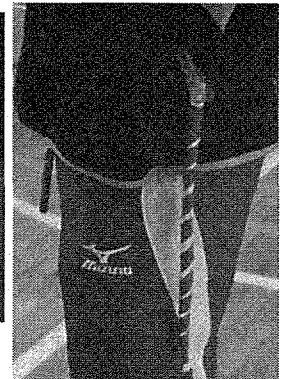
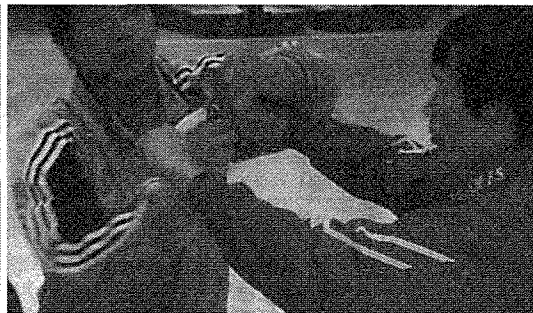
体育学習会集会

岩手にある体育学習会が一堂に介して、岩手の体育の未来の体育を考える集いが行われました。各地区から、たくさんの先生方が参加し、実りの多い学びの機会となりました。

タグラグビーは人生の縮図だ!!!

《タグラグビー》

◎マイタグをつくろう (愛のマイタグ：2人で力を合わせてつくろう)



材料

農業ロープ (10mm、ビニル製) 洗たくばさみ ビニルテープ

作り方

- ① 140cmを半分に折る。(70cm)
- ② 洗たくばさみの金具の部分を通し、さらに半分に折る。(35cm)
- ③ ビニルテープでとめる。(カラフルにするときれい)

完成図



◎準備運動

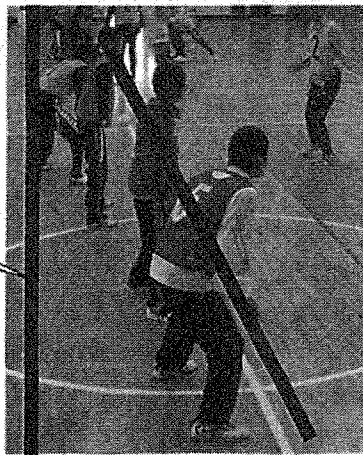
タグとり鬼

決められた時間内で何本とれるか。範囲や時間での工夫。

◎スキルゲーム

宝運びゲーム

ディフェンスが出てはいけないライン。



宝ものを持って敵の間をすり抜ける。タグを取られたら駄目だよ。

◎パス練習について

小学校授業レベルでは、相手が捕れればよいので練習はしなくてもよい。

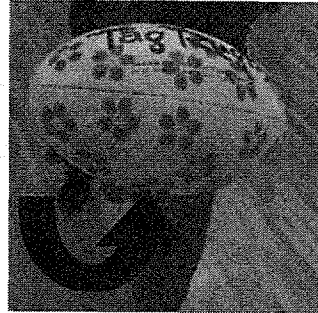
ちなみに

基本パス・・・肘を伸ばしボールを持つ。(右写真)そのままパス。

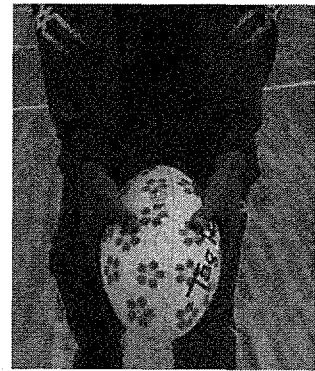
スクリーンパス・・・ボールを回転させてパスをする方法。

遠くまで、強いパスを投げるができる。

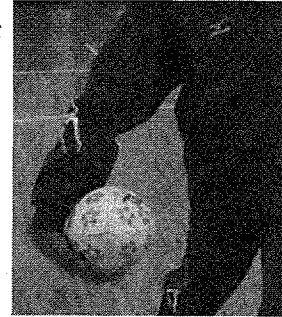
練習法 ①片手で、



矢印のような回転を
かけてパスをする



②①のようなパスのやり方を
この向きで投げる→



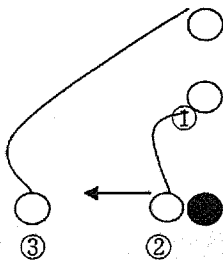
③②に両手を添えて完成。

◎ゲーム練習

タグラグビーの基本理念 **自己犠牲の精神**

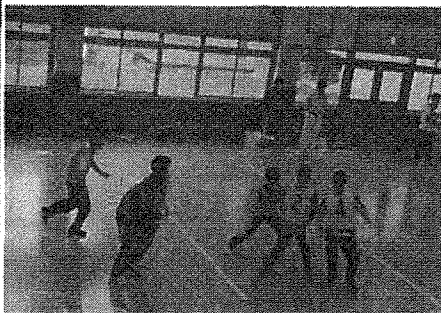
自分を犠牲にして(タグを取らせて)相手のディフェンスを止め、残った仲間にトライをさせる。

2 ON 1



- ①ボール保持者が、相手ディフェンスにせまっていく。
- ②相手ディフェンスにタグを取られなかったらそのままトライ。取られたら、その場でストップ。
- ③残った一人が、サポートの動きをしてボールをもらい、トライ。タグをとられた選手は、自然にスクリーンの動きになる。

人数が増えても、この動きが基本となる。



このほかに、2 ON 2・3 ON 3などを行いました。

おわりに

体育への熱い思いを感じることもできる、集会でした。各地区から26名もの先生方、学生が参加したくさんのことを学ぶことができました。岩手の体育をこれからも盛り上げ、先頭に立ちながら普及をしていきましょう。たくさんのご参加ありがとうございました。

(2) 授業研究会の開催

第6学年体育科学習指導案

指導案

日時 平成22年10月30日(土) 1校時
 児童 6年いちょう組 男18名女17名 計35名
 指導者 菅原 純也

1 単元名 わかたけGP (A体づくり イ体力を高める運動)

2 目標

関心・意欲・態度	体づくり運動に対する関心や意欲をもって互いに協力して運動をしようとする。また、健康や安全に留意して運動をしようとする。
思考・判断	自分の体力や生活に応じて、体力の高め方を工夫している。
技能	自分の体力や生活に応じて、体力を合理的に高めるための運動ができる。

3 構想表

◀目指す子どもの姿▶

自分の体力や生活に応じて、体力を高める工夫を考えながら、仲間とともに、自己の体力を向上させようとするのできる子ども。

学習過程の工夫	体力を高めるためには、運動量の確保と運動の強度をあげることが欠かせない。そのために、マネジメントやインストラクションを適切に行い、十分な運動量を確保したり、運動が正確に行われるように時間ごとにポイントを適切に指導したりする。
かかわるための工夫	チームで勝利を目指す内容のゲームを設定し、必然的に勝利に向かってのかかわりが生まれる内容にした。個々の体力を向上させるために学び合いの場面や作戦タイムなどを設定し、かかわりが多くなるようにした。
場の工夫	体育館内で、一定時間、長い距離移動する運動が行えるように、蛇行したサーキットを作成した。運動中に、つまずいても動きが止まらないように、必要な道具のほとんどを平なものにした。
言語活動の工夫	練習場面で、学び合いの観点に沿ってお互いの動きを見合いながら伝える活動を取り入れる。適切なアドバイスを紙板書に位置づけ、言語環境を整える。体育ノートを用い、学んだことを図や言葉で記録させる。

指導観

本単元では、運動の生活化という体育科の究極の目標に向かい、学習と生活をつなぎながら、体力の向上を目指したい。体力の中でも、機敏な動き、筋持久力、全身持久力を高めていきたい。機敏な動きは、単元前半の「オセロゲーム」や「助けて」、サーキットのラダー、反復横とび、返し縫走で培いたい。筋持久力は、アイソメトリックトレーニングを行い、体のどこに力を入れればよいのか、器械運動につながる体のしめも意識しながら行わせたい。全身持久力では、サーキットの動きを全力(オールアウト)で行わせ、その後、完全休息を取るレベティション法を用いる。全力の度合いは、主観的運動強度表からの主観評価と自己の心拍数測定における変化による客観的評価による。何度も全力で行うことには、体力的にも精神的にもつらいものになるので、チーム内での励ましや、前時の記録との比較、単元前半の自己記録(周回数や疲労度、心拍数)との比較などを通し意欲を高揚させたい。

生活化に向けては、アンケートで状況を確認し、運動の大切さや効果などを特別活動の時間に行ったり、万歩計を用い数値での判断をさせたりしたい。最終的には、この単元で終わる物ではなく、運動に対する意識の調査や運動状況、歩数チェックなど継続的にやりたい。生涯をわたって、運動していくための素地を養っていきたい。

児童観

運動に関するアンケートから、全員が運動することの大切さを知っている。また、運動に対する知識も豊富で、持久力・筋力・巧緻性を高める運動について適切に回答している児童が多い。しかし、毎日運動する児童は全体の10%程度しかおらず、運動することが定着しているとは言えない。体づくりの単元は5年生で、「巧みな動きを高める運動」で集団縄跳びの学習を行っている。

教材観

本単元は「巧みな動きを高めるための運動」と「動きを持続する能力を高めるための運動」を行う。巧みな動きでは、リズムカルに動いたり、力を調節したりしながら、姿勢や速さを変えながら移動することが、動きを持続させる能力では、障害物を超えながら、運動を続けることが内容となっている。また、体育の学習だけではなく、運動を生活の一部としてとらえ、実践していく力も培っていかねばならない。

4 単元の評価基準

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能
<ul style="list-style-type: none"> 自分の体の状態や変化に気づき、体を動かす楽しさや心地よさを味わうとする。 仲間と協力して互いに補助し合ったり、反復したりして進んで運動に取り組もうとする。 体づくり運動の必要性を正しく受け止め、進んで体力を高めようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> グループで運動のポイントを相談したり、工夫したりしている。 	<ul style="list-style-type: none"> 体力を高める運動を身に付けたり、合理的に体力を高めたりすることができる。

5 指導・評価計画

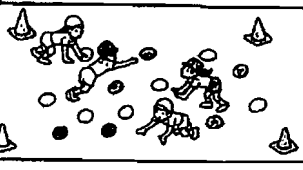
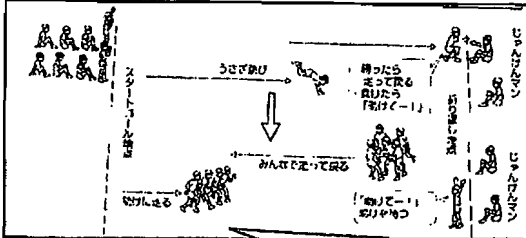

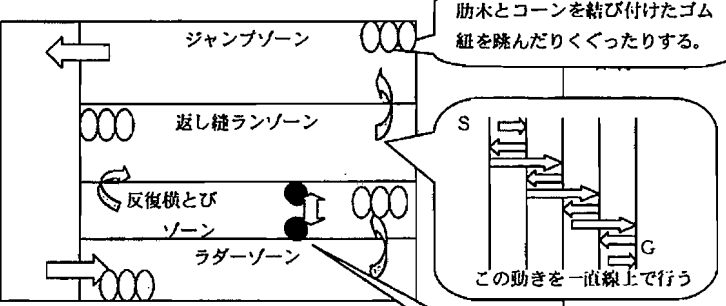
1	2	3	4 (本時)	5	6
オリエンテーション	体づくりセット (オセロゲーム ・ 助けてー ・ アイソメトリックインターバル)				
	ラダーのコツ	ターンのコツ	返し縫ランのコツ	ジャンプのコツ	F1 (F)UZOKU(1) (附属NO1決定戦)
	わかたけレース				
関新しい運動に(A:意欲的に)取り組もうとしている。	思ラダーのポイントについて(A:適切に)理解している。 技素早い動きで(A:リズムよく)ラダートレーニングができる。	思素早いターンのポイントについて(A:適切に)理解している。 技(A:リズムよく)重心の低い反復横とびができる。	思切り返しのポイントについて(A:適切に)理解している。 技両脚での(A:素早い)切り返しができる。	思ジャンプのポイントについて(A:適切に)理解している。 技(A:リズムよく)ジャンプで障害物を超えたり、くぐったりすることができる。	関友達と励まし合っ(A:積極的に)レースに取り組もうとしている。 技学びをいかしながら(A:安定した)体力を高める運動を行うことができる。

6 本時の展開

(1) 目標

- ・切り返しのポイントについて理解している。【思考・判断】
- ・両脚での切り返しができる。【技能】

(2) 展開

学習内容と活動	指導上の留意点	☆用具等											
<p>導入</p> <p>1 あいさつ 2 体づくりセット</p> <p>カードをひっくり返していくゲーム。制限時間内に多く変えたチームの勝ち。</p>   <p>・元気のよいあいさつをさせる。 ・オセロゲーム ・助けてー</p> <p>☆パッド ☆コーン ☆デッキ</p>	<p>折り返し地点で相手のジャンケンマンとじゃんけんをし、勝てばそのまま走ってスタートラインへ戻る。負けた場合は、「助けて」と叫んで、自チームの仲間を待つ。ジャンケンに負けたチームは、全員で手をつないで折り返し地点まで助けに走り、待っている仲間を輪の中に入れ、走ってゴール。</p> <p>・アイソメトリックトレーニング 腹筋 ウルトマン 側筋</p>  <p>アイソメトリックとは、等尺性運動。筋肉の長さを変えないで筋力を発揮すること。</p>												
<p>3 課題の確認</p> <p>どうすれば素早く返し縫走をすることができるのか</p> <p>4 チーム練習</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>思考</th> <th>具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)</th> <th>支援を要する児童</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>評価方法 ・行動観察 ・学習カード</td> <td>切り返しのポイントについて (A：適切に)理解している。</td> <td>ゆっくりとした動きでポイントを 理解させる。</td> </tr> </tbody> </table> <p>○記録の向上を目指して、意欲的に取り組ませる。</p> <p>5 わかたけレース</p> <p>レースのルール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・15分間で何周できるか、チームの合計が、前時と比べていくら伸びたかで競う。 ・1周を全力で走る。ゴール後、心拍数を測り、それを記録し、自己のからだの変化の手掛かりとする ・ゾーン以外の移動は、雑巾がけで行う。 ・ルールにそって行っているかお互いにチェックし合う。  <p>筋木とコーンを結び付けたゴム紐を跳んだりくぐったりする。</p> <p>この動きを一直線上で行う</p> <p>反復横とびゾーン。目印に手でタッチする。4回タッチする。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>技能</th> <th>具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)</th> <th>支援を要する児童</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>評価方法 ・行動観察 ・学習カード</td> <td>両脚での (A：素早い) 切り返しができる。</td> <td>オノマトペでイメージさせる。(ピュッと切り返してなど) 適切なフィードバックをしていく。</td> </tr> </tbody> </table>	思考	具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)	支援を要する児童	評価方法 ・行動観察 ・学習カード	切り返しのポイントについて (A：適切に)理解している。	ゆっくりとした動きでポイントを 理解させる。	技能	具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)	支援を要する児童	評価方法 ・行動観察 ・学習カード	両脚での (A：素早い) 切り返しができる。	オノマトペでイメージさせる。(ピュッと切り返してなど) 適切なフィードバックをしていく。	<p>☆紙板書</p>
思考	具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)	支援を要する児童											
評価方法 ・行動観察 ・学習カード	切り返しのポイントについて (A：適切に)理解している。	ゆっくりとした動きでポイントを 理解させる。											
技能	具体的評価規準 (A：十分満足できる状況)	支援を要する児童											
評価方法 ・行動観察 ・学習カード	両脚での (A：素早い) 切り返しができる。	オノマトペでイメージさせる。(ピュッと切り返してなど) 適切なフィードバックをしていく。											
<p>まとめ</p> <p>6 本時のまとめ ・体育ノート ・振り返り</p> <p>7 あいさつ</p> <p>・分かったことや友達のよかったところなどを発表させる。 ・元気のよいあいさつをさせる。</p>													

第151回 盛岡体育学習会通信

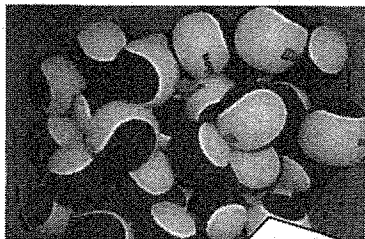
第2010. 11. 29. 5代世話人 附属小 菅原

参加者：浅沼道成先生 (岩手大学) 菊池眞博さん 四戸健太郎さん (テニスチャレンジいわて2020)
三上章洋 (大新小) 庄司尚人 松田香 (岩大学生) 根本地 松村 菅原 (附属小)

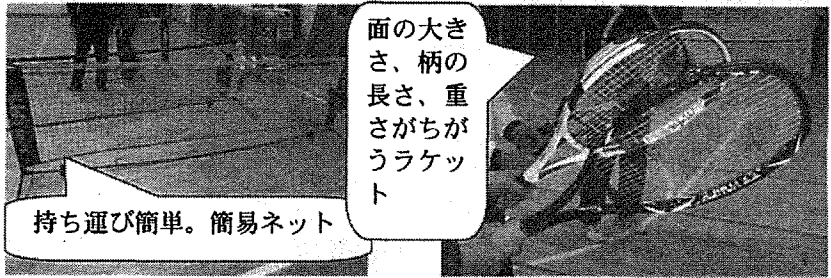
今回の学習会では、「ネット型の可能性を探る」というテーマで行いました。岩手県テニス協会の全面支援を受け、スポンジテニスを中心に段階を踏んだテニス型ゲームの指導について、教えていただきました。結論から言うと、ネット型は大いなる可能性を秘めた領域であるということです。とても有意義な学習会となりました。

○道具について

テニスは、ラケットやボールの種類によってプレーの難易度が大きく異なってくる。発達段階やレベルに応じた適切な道具の提供も重要になってくる。



大人のボールより空気圧が低い



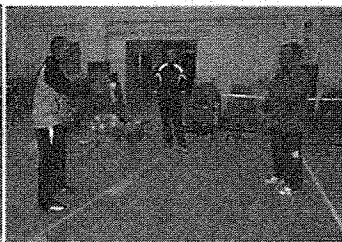
○ウォーミングアップ (ジャグリングトレーニング)



1人で投げあげ



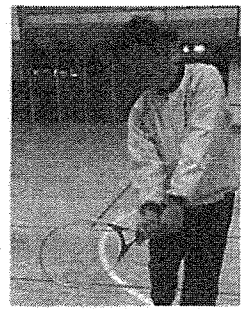
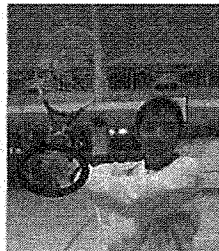
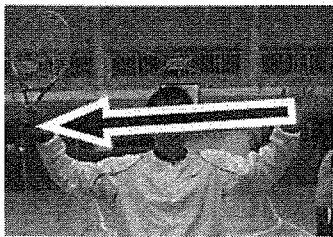
2人組。バウンドとスローイングを2人同時に行う。



段階的な指導により、器用さを育てる。ボールの個数や技の難易度を組み合わせながら最終的にみんながうまくなっているように仕組んでいる。ボールの個数を変えながら行っていく。

○ラケットを持って (スキルゲーム)

・フォアハンド



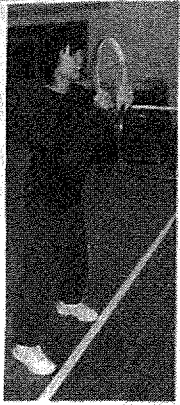
①利き手にラケットを持って ②空いている手を下に ③1でこの体勢 ④「と」 ⑤2で当てる

(「1と2」という。「1」と教えてテイクバック。「と」で踏み込む。「2」で面をあてる。)

※バックハンドは「②」の空いている手が上にくる。

※うまく面で当てられない子に対しては、ゴロを投げあげてあげる。そうすると、面で当てることができる。

・ポレー



ジャンプして「バ」になる。これは両足に均等に体重をかけ、どちらにボールが来てもすぐ対応できるため。ラケットのフレームを持つのは、ポレーをする際にラケットを振りすぎないようにするため。

・感覚作り

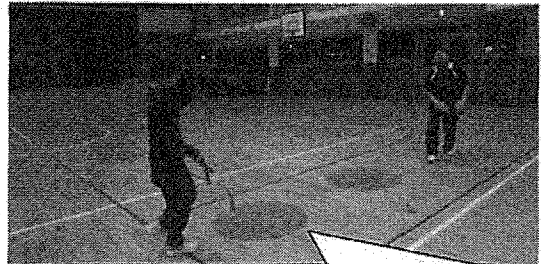


フォアやバックでボールをとらえる感覚をつくる。サッカーのリフティングの要領。
 ①ボールをバウンドさせてフォア（バック）でリフティング②ボールをバウンドさせてフォアとバックを一度ずつ交互に。③バウンドさせないでフォア（バック）でリフティング④バウンドさせないでフォアとバックを一度ずつ交互に。

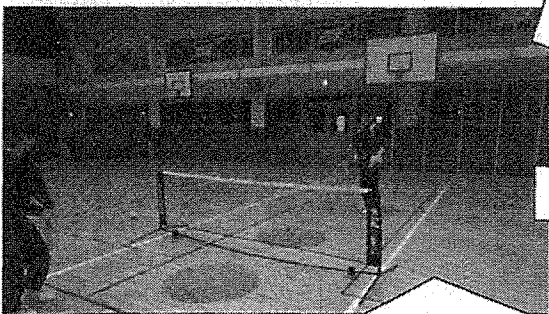
○対人ゲーム（タスクゲーム）（やじるしは難易度の進み）



中央に円が1つ。ここにボールをバウンドさせる。交互に打つ。ラリーが続くように土にバウンドさせるようにする。ボールより人が動く。



中央に円が2つ。ここにボールをバウンドさせる。相手に近い円をねらう。円に入ったら1点。制限時間内で点数の多い方が勝ち。



中央に円が2つとネット。ここにボールをバウンドさせる。相手に近い円をねらう。円に入ったら1点。制限時間内で点数の多い方が勝ち。



中央に円が4つとネット。ここにボールをバウンドさせる。サーブを相手コートの円に入れたら1点獲得し、ゲームを続行する。円に入らなくてもゲームは続行になる。

終わりに

この4つの段階的なゲームを行って、「ネット型は大いなる可能性を秘めた領域である」と感じました。これらのゲームはシンプルな構造です。これ自体で、メインゲームになり得ると思います。小学校であれば、ハンドテニスで行ったり、プレルボールの導入やタスクゲームに用いたりすることもできます。さらに、このゲーム自体も工夫することができます。例えば、「円の色を変えて相手に言われたほうの色の中に入るとボーナス」や「円以外のスペースをねらう」などが考えられます。私はテニスのスキルを学んだのと同時に、ネット型の動き方や相手コートへの狙い方も学ぶことができました。これは、「ボールへの動き方」で分類した新指導要領のよさだと感じました。テニスを学べばバレーもうまく動くことができるのです。これからは、種目を学ぶのではなく「本質的動き」は何かをシンプルにとらえ、それを他の同じ型の種目に結び付けられないか考えていかなければならないと考えています。そして、それは、子どもたちにも言えることです。「あのとき学んだことがこの種目でもいかせる」「この種目はあの作戦が使える」というように結び付けて考えられるようになる子どもをそだてていかなければなりません。体育的学力が叫ばれる現在、そういった知識の系統があってもよいのではないのでしょうか。そんなことを考えた学習会でした。最後になりますが、さまざまな用具や資料の準備をいただきました。テニス協会の皆様にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

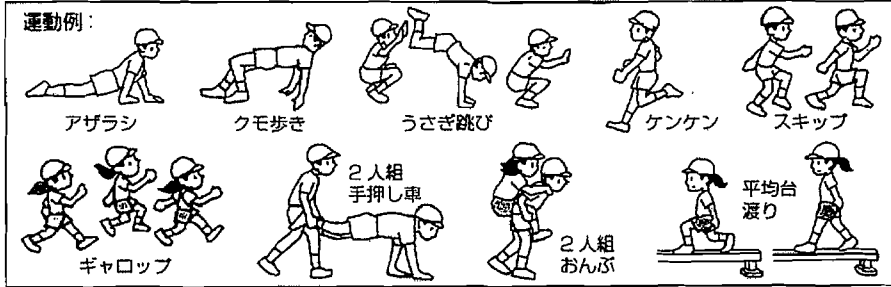
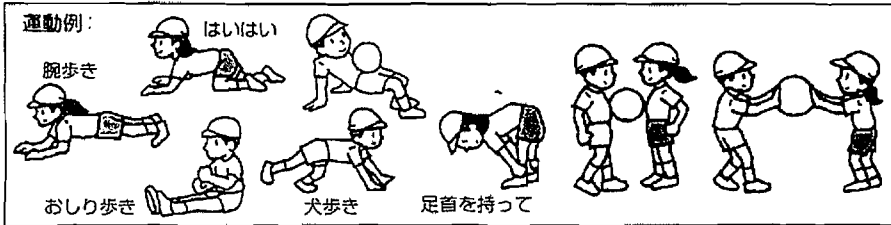
A 体づくり運動

〔第1・2学年〕

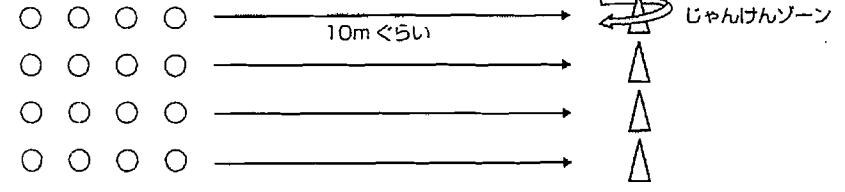
〔多様な動きをつくる運動遊び〕

1 折り返しの運動遊び（体を移動する運動遊び、用具を操作する運動遊び）

- 横隊に広がり、片道10mほどを以下のような運動で進み、コーンのところで折り返し、走って戻ってきて次の人と交代する。正確に行うことを意識させることが大切。
- 慣れてきたら、じゃんけんを取り入れ、コーンの所で隣の人とじゃんけんをする。負けたら、カエルの足うちや壁上り逆立ちなどをしてから戻ってくるようにアレンジすると良い。

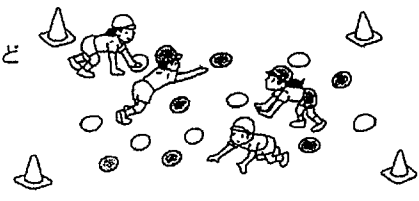


場の工夫



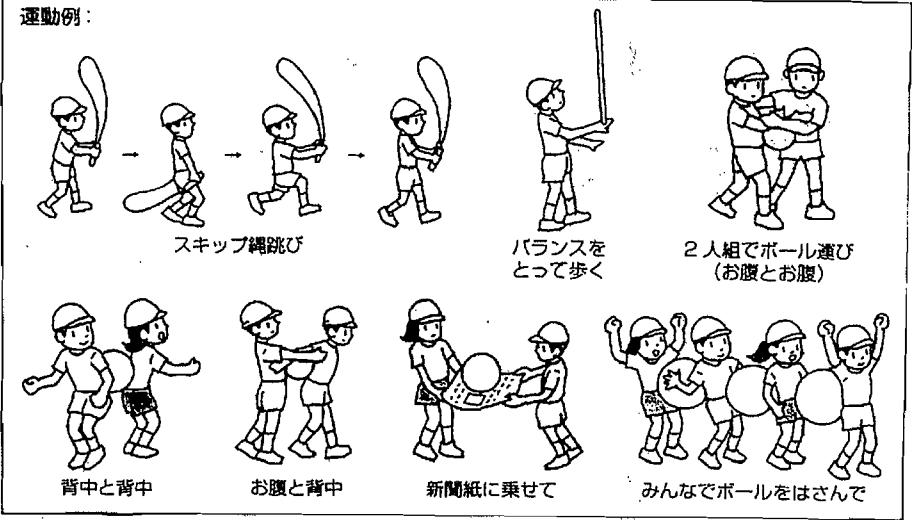
2 オセロゲーム（体を移動する運動遊び）

- 自分のチームカラーのカードにひっくり返していくゲーム
- 制限時間内に多く変えたチームの勝ち。
- 動物歩きで、走って、ケンケンでスキップなどで移動の仕方を変えることでアレンジできる。



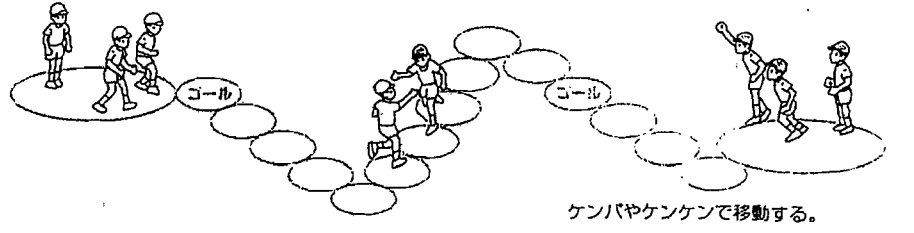
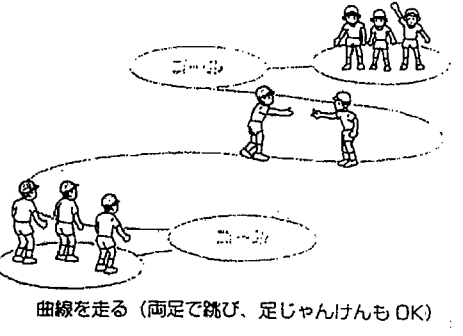
3 折り返しリレー遊び（用具を操作する運動遊び、体のバランスをとる運動遊び）

折り返しの運動の要領で様々な動きをリレー形式で行う。（動きに慣れるまでは、折り返しの運動形式で行い、正確に行うことを意識させる。）



4 陣取り遊び（体のバランスをとる運動遊び、体を移動する運動遊び）

- チームに分かれて対抗するゲーム。円形や曲線、クランク、平均台などのコースをバランスをとって歩く、走る運動。各チームから一人ずつ相手陣に向かって移動する。
- 相手と出会ったところでじゃんけんをして勝ったほうはそのまま進み、負けたほうは次の人が出発する。
- 相手陣についたら1ポイントとし、一定時間のポイント数を競い合う。走るだけでなく、ケンバやケンケンなどの「跳ぶ」運動や「這う」運動を取り入れるなどしてアレンジする。



〔第3・4学年〕

【多様な動きをつくる運動】

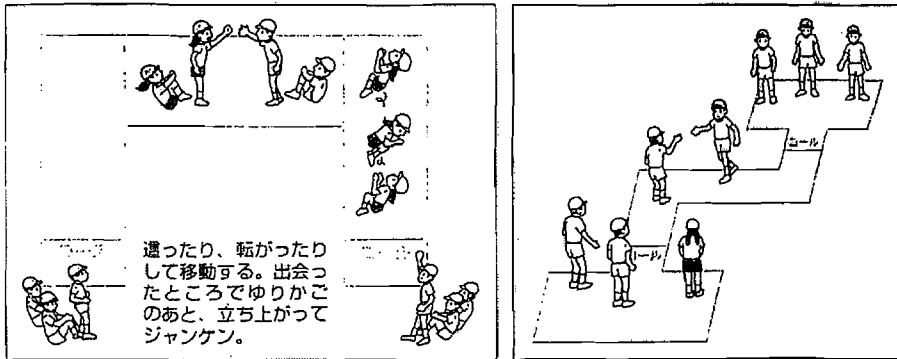
1 陣取りゲーム（這う、走る、跳ぶなどの体を移動する運動）

○基本のルール

- ・2チームに分かれて対抗する。
- ・円形や曲線、クランクなどのコースをすばやく走ったり、転がったりする。
- ・各チームから一人ずつ相手陣に向かって移動する。相手と出会ったところでじゃんけんをして勝った方はそのまま進み、負けたほうは次の人が出発する。
- ・相手陣に着いたら1ポイントとし、一定時間のポイント数を競い合う。

○ルールの工夫例

- ・走るだけでなく、ケンパやケンケンなどの「跳ぶ」運動や「這う」運動を取り入れるなどしてアレンジする。



2 じゃんけん双六（はねる、跳ぶなどの体を移動する運動・用具を操作する運動・力試しの運動）

○基本のルール

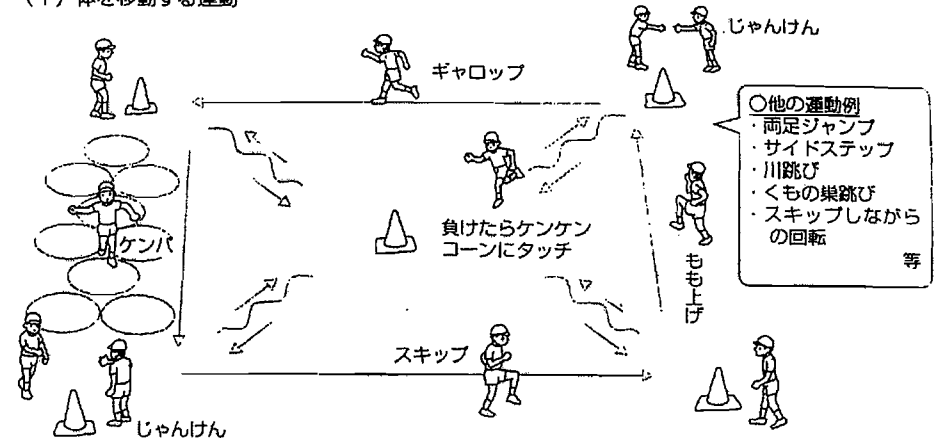
- ・四方に置かれた4つのコーン（約15m四方）を、左回りで進んでいく。
- ・初めは各コーンにランダムに散らばる（偶数がよい）。コーンの場所で相手を見つけてじゃんけんをする。勝ったら隣のコーンへ移動し、負けたら別の相手とじゃんけんをする。
- ・3周したら「上がり」となり、コーンの場所で座ってじゃんけんマンとなる。

○ルールの工夫例

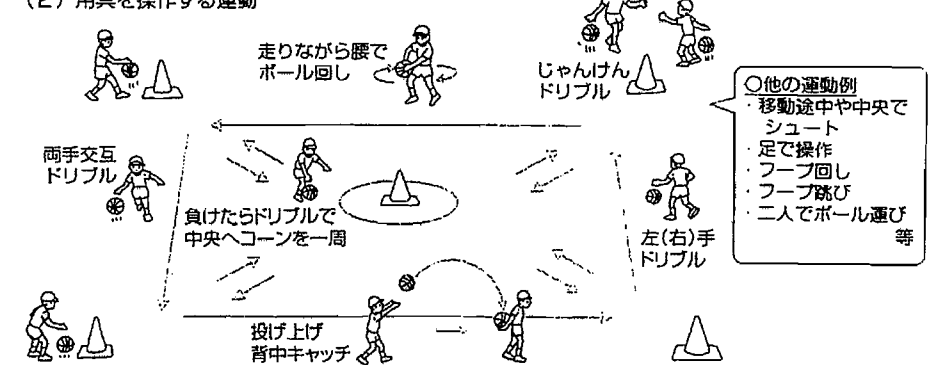
- ・じゃんけんの仕方を足じゃんけんや全身じゃんけんなどアレンジする。
- ・じゃんけんで負けたら、コーン中央へケンケンや手足走りなど指定した動きで移動してから、かえる足打ちや開脚ジャンプなどの運動をし、元の場所へ戻ってまたじゃんけんをする。
- ・1つ進んで1ポイント（一周で4ポイント）というポイント制にする。一定時間内（3分程度）でのポイント数を個人やチームで競うなどポイントのカウントを工夫する。

- 高学年でも、授業の前段で主運動につながる動きづくりとして、または主運動として、さらに主運動後のまとめの運動として等さまざまな段階で行うことができる。

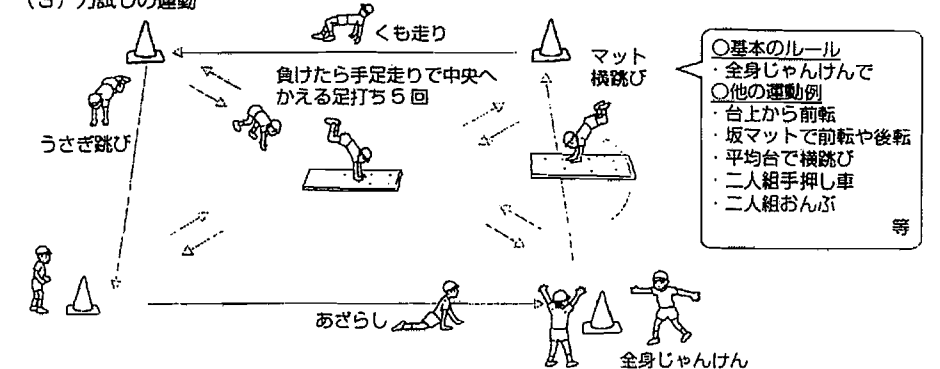
(1) 体を移動する運動



(2) 用具を操作する運動



(3) 力試しの運動



【第5・6学年】

【体ほぐしの運動】

○チャレンジ運動

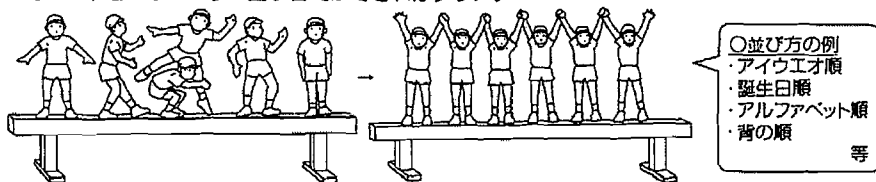
仲間同士で助け合ったり依存したりしながら、集団的達成の喜びを生み出すことをねらいとしている。また、活動を通して仲間とかかわる楽しさを体験することができるとともに、仲間のよさを認め合うことができる。

○基本のルール

- ・チームメイトを名前やニックネームで呼ぶ。(名字で呼んではいけない。)
 - ・課題をクリアするための方法をチーム全員で考える。
 - ・グループの全員で励まし合い、助け合って活動する。
 - ・チームメイトにプレッシャーをかけたり非難したりしてはいけない。
 - ・活動中や活動後はチームメイトに励ましや賞賛の言葉をかける。
- 「いいぞ!」「その調子!」「せーのっ」「上手い!」「よくやった!」「すごい!」等
- ・課題をクリアできたら、チームメイトのよかったところを評価し合う。
- ※これらのルールを一つでも破れば、はじめからチャレンジをやり直す。

(1) 平均台並べ替え

平均台から落ちないように並び替えができればクリア。



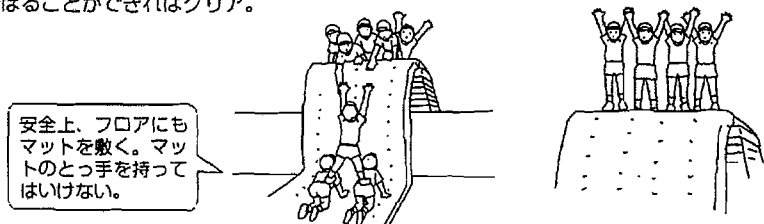
(2) ザ・ロック

岩に5～6人のメンバー全員で乗り、5秒間バランスをとることができればクリア。



(3) 壁のぼり

ステージ上に跳び箱8段を横向きで2台並べ、マットをかぶせて壁をつくる。メンバー全員が壁にのぼることができればクリア。



【体力を高める運動】

1 助けてー!

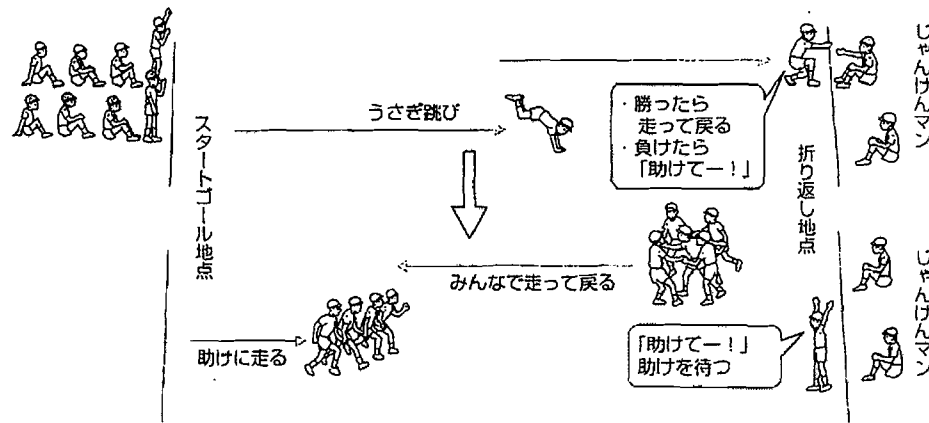
- 運動の特性…折り返しリレー(体づくりP3参照)に変化を加え、自分の走る番を待っている児童も巻き込んだ形のゲームにする。競争を楽しみながらチーム全員でより積極的にゲームに参加することで児童の意欲を高め、運動量の増加を図ることができる。内容を簡素化し、低・中学年でも扱うことができる。
- 授業の中で…前段で主運動につながる動きづくりとして、または体ほぐしの運動として、様々なねらいで行うことができる。
- 多様な動き…いろいろな動きでの移動、じゃんけんの仕方等を工夫し、基礎的・基本的な動きづくりを目指す。

○基本のルール

- ・折り返しリレーの要領で様々な動きをリレー形式で行う。
- ・折り返し地点で相手チームのじゃんけんマンとじゃんけんをし、勝てばそのまま走ってスタートゴールラインへ戻る。負けた場合は「助けてー!」と叫び、自チームの友達を待つ。
- ・じゃんけんにも負けたチームは全員で手をつないで折り返し地点まで助けに走り、待っている友達を輪の中に入れ、走ってスタートゴールラインへ戻る。

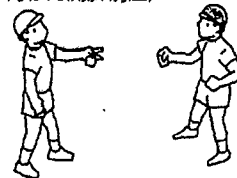
○ルールの工夫の例

- ・[じゃんけんの仕方] 足じゃんけんや全身じゃんけんで。
- ・[じゃんけんで負けたら] 輪の中でも様々な動きをして、スタートゴールラインへ戻る。
- ・[じゃんけんマンなしで] 折り返し地点でのじゃんけんを隣チームの相手とする。



2 体の柔らかさを高める運動

〈じゃんけん開脚前屈〉



二人組でじゃんけんをし、負けた方が脚を開いていき、限界になったら床に座って開脚前屈をする。

3 力強い動きを高める運動

〈腕立てじゃんけん〉



腕立て伏せの姿勢で向かい合い、じゃんけんをする。負けた人は、腕立て伏せを1回する。

【プロジェクト名】

附属中学校における特別支援教育のあり方

【プロジェクト担当者】

◎塚野弘明・伊藤喜代美・小野甚市・角谷隆章・羽澤美紀・吉田美佐子・新堀裕二（支援員）
加藤義男・鎌田文聡（以上教育学部）、佐藤英子（附属特支）、高橋長兵・川越浩子（附属小）

【概要】

- (1) 特別支援教育に関する校内体制の構築
- (2) 学部、附属校園、支援施設等との連携
- (3) 特別支援教育支援員の活用
- (4) 特別支援教育セミナーの開催

【目的】

平成 19 年 4 月から「特別支援教育」が学校教育法に位置付けられ、すべての学校において障がいのある幼児、児童、生徒の支援を充実していくこととなった。附属学校においても近年、発達障がい等の特別な支援を要する子どもがどの校種でも在籍するようになり、その対策が急務となっている。すでに、附属特別支援学校においては平成 16 年に特別支援教育センターを開設し、地域の拠点となるセンターとして活動を開始している。また、附属小学校においては、平成 20 年、21 年の 2 年にわたって教育学部プロジェクト推進支援事業「通常学級における学習指導を中心とした特別支援教育の在り方」に応募し一定の成果を上げてきている。こうした動きを踏まえ、岩手大学第二期中期計画では、「通常学級に在籍している発達障害のある幼児・児童・生徒への支援指導を実施する」が盛り込まれ、平成 22 年度の事業として学部・附属学校特別支援教育推進委員会の設置を挙げている。附属中学校では、発達障がい等の生徒に対する支援員として非常勤講師を採用し、本年度の課題として特別支援教育の組織的対応について着手したところである。本事業では、特別支援教育に対する教員相互の連携と教員研修を通じて校内体制を構築し、保護者、専門機関との連携を取りながら組織的に支援に取り組むとともに、特別支援教育セミナーを実施し教員研修に取り組むことを目的とする。

【実施計画・方法】

(1) 校内体制の構築

特別支援教育推進委員会を設置し、特別支援コーディネーターを中心に、生徒指導部、担任、支援員、養護教諭の連携を図るとともに、対象生徒の個別指導方針を検討する。

特別支援教育支援チームを組織し、特別支援コーディネーターを中心に、担任、支援員の情報共有を行いながら、保護者との情報交換、連携を図りつつ具体的に支援にあたる。必要に応じて推進委員会を開催して対応策を検討する。

(2) 学部、附属校園、支援施設等との連携

特別支援教育推進委員会の決定により、必要に応じて専門機関（県立療育センター、附属特別支援学校、教育学部）の支援、助言を受ける。

附属小中連絡会において附属小学校から入学する特別支援対象生徒についての情報を共有する。

学部特別支援教育推進委員会、学部 GP、学部主催教員研修会を通じて教育学部と連携する。

(3) 特別支援教育支援員の活用

特別支援教育支援員を採用し、学校生活全般にわたって対象生徒の支援に当たると共に、推進委員会、支援チームと共同で支援方法について検討する。

(4) 校内研修の推進

特別支援コーディネーターを中心に先進校の視察を行い、教員研修の一環として特別支援教育セミナーを、他の附属校にも呼び掛けて実施する。

【取組状況】

(1) 校内体制の構築

①特別支援教育推進委員会の設置（約月1回の開催）

構成員：校長、副校長、特別支援コーディネーター、担任、支援員、養護教諭、
（教育相談員：2次的障がいとの関わり）

実施内容：状況把握、情報共有、支援の評価、個別指導方針の検討、研修会の企画・実施、専門機関との連携、学部事業への対応

②特別支援教育支援チームの設置（週1回の開催：金曜日昼休み）

構成員：担任、支援員、特別支援コーディネーター

実施内容：情報共有、状況把握、支援内容の確認、親との情報交換・相談、学年団・教科担任との連携、生徒指導部との連携

(2) 学部、附属校園、支援施設等との連携

①県立療育センターとの連携

対象生徒が療育センターを受診していることから診察、面談があった際に、情報提供を受けた。対応に困った場合、支援相談員に5回にわたって来校していただき助言を受けた。

②附属特別支援学校との連携

附属特支担当教員から対象生徒を視ていただくと共に指導方法について助言を受けた。
附属特別支援教員の研修の一環として本校の授業参観を行った。

③教育学部との連携

学部特別支援教育推進委員会、学部主催教員研修会に参加すると共に、対象生徒に関する専門的助言を受けた。

④附属小学校との連携

年度末の小中連絡において来年度入学の対象生徒に関する情報交換を行った。

(3) 特別支援教育支援員の活用

4月に福祉施設を退職した支援員を採用し、主として昨年度、度重なる問題行動を示した対象生徒の支援を行った。10月末日をもって支援員が退職し、11月に新たな支援員を募集し12月から支援に当たった。

(4) 特別支援教育研修会の実施

平成22年11月10日（水）に学部・附属校特別支援教育推進委員会との共同開催で特別支援教育セミナーを実施。滋賀県立日野高等学校山口比呂美教諭による講演、および附属小学校高橋長兵教諭による「日本LD学会第19回大会参加報告」、附属中学校小野甚市教諭による「附属四校園コーディネーター会議報告」を行った。

(5) 特別支援対象生徒の洗い出しと気になる特徴を持つ生徒の把握

新たに特別支援対象生徒を1名加えた。それ以外に「気になる生徒」の特徴について各教科担任が全学級の生徒の授業中の様子を観察するという方法で調査したところ、対象生徒以外で

各教科担任から問題ありとの報告が集中した生徒が思った以上に多数認められた。

1 忘れ物が多い 2 授業中よく寝る 3 指示を理解できない 4 黒板を写せない 5 その他

(6) 支援対象生徒の個別指導計画を作成し支援に当たった。

以下のようなフォーマットを作成し、約1ヶ月～2か月ごとに対象生徒の生活面、行動面、対人関係面、その他の4つの側面から、生徒の状況、緊急度の評価、指導上の課題を推進委員会でけんとうした。以下は、対象生徒Hの10月～11月の個別指導計画の例である。

	生徒の状況	緊急度	指導上の課題
A 生活面	家でパソコンを1日6, 7時間やっているため寝不足状態で遅刻が目立つ。	○	近々、療育センターの診察が予定されている。家庭内での問題が学校生活に影響しており、家庭での課題解決が急務である。
B 行動面	特定の教科(保健体育、音楽、美術)の授業を欠席する状況は続いている。1日の気分の変化が激しいが、周期的なものかどうかは確かではない。11月になり小康状態が続いている。 11月15日の実技科授業中に注意を受けた後、蹴る、暴言、トイレなどに閉じこもるなどの行為が見られ、担任、教育相談員が対応した。落ちつくのに1時間程度かかったが、その後の授業では普段の状態に戻る。	△	気分の変化が周期的でなければ話題の切り換えで対応する。 暴力、暴言などが見られた場合は、その場から引き離し、他の生徒のいないところで対応する。 実技教科が苦手なためストレスがたまりやすいので注意が必要である。
C 対人関係面	話のできる仲間、友人がいない。特定の女子生徒に対して「消えろ」「死ぬ」などの暴言、足蹴りなどをする。 11月15日には初めて担任にも暴言を吐く。 父親との関係がかなり険悪になっている。父親自身反抗期がなかったらしく、「親の言うことを聞かない」ことが信じられないという。子どもの一高への進学を望む一方、「障がい者だから施設に行け」と言うなど、子供への悪影響が出ている。	○	とにかく、暴言、暴力はやめるように指導する。障がいの特性から友人関係を作るのは難しい。受験準備の時期になってくるため周りの生徒に協力を求めるのは負担が大きく難しい。
D その他	今後、進路指導が始まる時期を迎えるが、父親の不理解、関係悪化の問題が絡むだけに難しい問題である。思春期の成長が感じられるようになっており、障がいに気付き始めている気配がある。障がいのことを本人に伝え、自覚を促す時期とも考えられるが、父親の「施設に行け」という発言に「障がい者じゃない」と反発していることから、現時点で障がいのことを伝え		将来、働いて食べていかななくてはならないこと、そのためには高校進学を果たさねばならないこと、いずれ家を出て自立しなければなら

<p>ることは得策ではない。タイミングを見てドクターに告知してもらおうのがよい。告知後は、学校は本人が話すまでは知らないふりをし、本人が話した後もアスぺのことは一般論として知っていたが、特に驚かないという対応が必要である。</p>	<p>いこと等を本人に伝えていくことが必要である。</p>
---	-------------------------------

【考察】

本プロジェクトにおける最も大きな成果は、校内体制の構築により、特別支援教育に関する組織的な取り組みを開始したということである。特別支援コーディネーターを核として、支援チームが保護者との情報交換を行いながら具体的な支援・指導にあたり、必要に応じて推進委員会で専門機関の助言を受けながら個別指導方針を立てるといった校内連携体制は軌道に乗ったと考えられる。

年度当初より、県立療育センター、附属特別支援学校、教育学部から繰り返し専門的助言を受け支援の精度を上げた他にも、附属小学校との情報共有、学部関連委員会や研修会への参加など関連機関との連携も実施した。

本年度は特別支援教育支援員を非常勤講師として採用し、対象生徒の学校生活全般にわたる状況把握および支援をスタートさせた。中学生という年齢特性に起因する課題も浮上したことから、支援員の活用方法については来年度の重点目標としたい。

学部 GP の予算的援助により、特別支援コーディネーターや担任教員の先進校視察、講演会参加など、核となる人材の研修に加えて、特別支援教育セミナーの実施、専門書籍の購入によって全教員の研修を実施した。こうした中、春以来不登校状態だった一人の対象生徒が冬休み明けから登校しはじめるようになった。不安定な状況は続いているが、本校の取り組みの成果の一つと考えている。

【今後の展開（課題）】

(1)思春期特有の支援の難しさ

本年度は、特別支援教育支援員を採用して支援に当たったが、対象生徒が支援どころか、時には支援員が近づくことすら拒否するという事態に遭遇した。青年期前期（思春期）は、自己についてのメタ認知能力が育つ時期であり、この特徴が支援という特別扱いを忌避するという行動につながったと考えられる。したがって、支援員は特別な注意を向けているという素振りを見せないようにして、緊急の場合に備えて遠くから見守らなければならなかった。

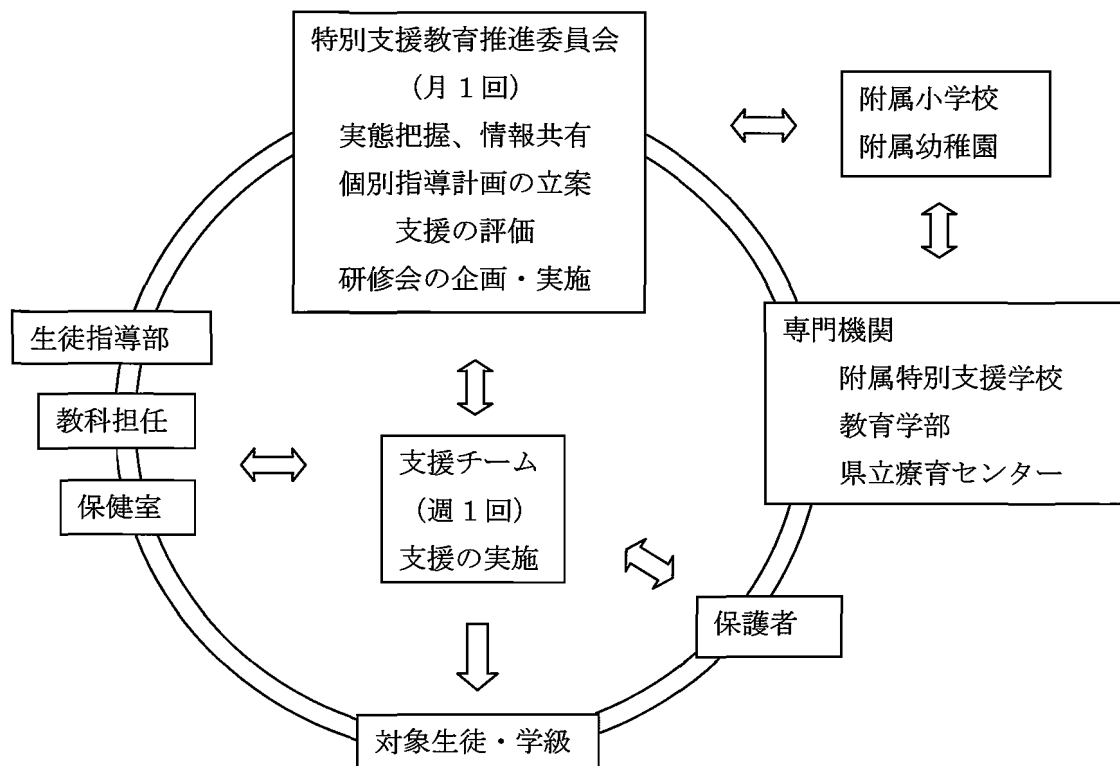
(2)支援員の活用方法の難しさ

こうした状況は、支援員の仕事に対するやりがいに影響することは想像に難くない。多少の困難はあっても、支援を望んでくれていればまだしも、時には支援員が罵倒されるということもあって、かなりの負担をかけていたと思われる。こんな中、10月に突然、支援員が退職を申し出ることがあり、支援員の活用方法の難しさを痛感することとなった。そこで、新支援員には、対象生徒だけでなく、その他の生徒への支援や他の仕事を願うなどの工夫を行ったが、支援員の活用策は来年度への課題となっている。

(3)発達障がいと情報メディア

本年度、本校の特別支援対象生徒は3名であるが、このうち2名がパソコンやインターネットに長時間を費やし、寝不足や昼夜逆転の生活に陥り、遅刻、不登校が常態化したことがあった。情報メディアは、親が安易に与える傾向があるが、特に発達障がいの生徒の場合、自己コントロール能力や自制心との関係で依存症になりやすいのではないかとと思われる。しかし、障がいと情報メディアとの関係についての研究報告は、そのほとんどがハンディーを克服するための積極的利用に関するものであり、悪影響や情報メディアの適切な利用方法の指導については今後の課題である。

附属中学校特別支援教育校内体制



資料2

ある学級の特別支援対象生徒とその他の生徒の教科担任による評価

1 忘れ物が多い 2 授業中よく寝る 3 指示を理解できない 4 黒板を写せない 5 その他

番号	氏名	国語	社会	数学	理科	英語	音楽	美術	技術	家庭	保体
1	*****										
2	*****										
3	*****	2			1						
4	*****										
5	*****	23	2	1234	123			135			1
6	*****										
7	*****	3		3	13				3		
8	*****	1234		2	123						
9	*****										
10	*****										
11	*****										
12	*****	3			1				3		
13	*****										全くできない
14	*****										
15	*****								3		
16	*****	2		25	1	2					35
				行動が遅い							
17	*****								5		
								意図が伝わらない			
18	*****										
19	特支対象生徒	345		3	1		5		3	13	1
20	*****								3		

平成22年度教育学部プロジェクト推進支援事業報告書

1 プロジェクト名

通常の学級における特別支援教育の理解と啓発に向けた推進支援事業
～特別支援教育セミナー及び実践交流会の開催を通して～

2 プロジェクト担当者

岩手大学教育学部附属特別支援学校

◎宮崎 眞 (校長) 福田 隆彦 (副校長)

高橋 縁 谷村 佳則 田村 英子 佐藤 英子 菅原 雅美 及川 弘禪

外館 悌 木村 重晴 中村 昭彦

3 概要・目的

研修については、発達障がいに関する研修を取り入れる。特に、特別支援教育セミナーでは、大阪医科大学附属LDセンターに講師を依頼し、発達障がいの中でも学習障害児の視機能の問題について講演を依頼した。講演では、目の運動能力が弱いことで起こる学習場面での行動等も話題にして頂いた。また、演習も取り入れ、学習場面での困難さへの気づきや、児童、生徒を観察する際の視点が増えていくことをねらいとした。

実践交流会では、県内の先進的な取り組みがされている学校の実践を一堂に会して聞く機会とした。各校種（小学校、中学校、高等学校）の指導の実際についての事例発表を通し、それぞれの校種の現状を知るとともに、支援の実際に触れ、今後の指導の参考となればと考えた。いずれの会も、教員の研修の場とし、障がいに関する理解や専門性を高める機会とし、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員にも広く呼び掛けた。

また、これらの研修を企画・運営し、最新の情報や実践事例から学ぶことで、今後の地域支援につなげたい。また、学部との連携を図りながら地域支援を行い、本校のセンター機能が更に拡充することにつながるのではないかと考える。

4 実施計画・方法

(1) 特別支援教育セミナーの企画、運営

○「見る」事の理論と、演習を通して児童、生徒の困難さを体験し児童、生徒理解につなげる。

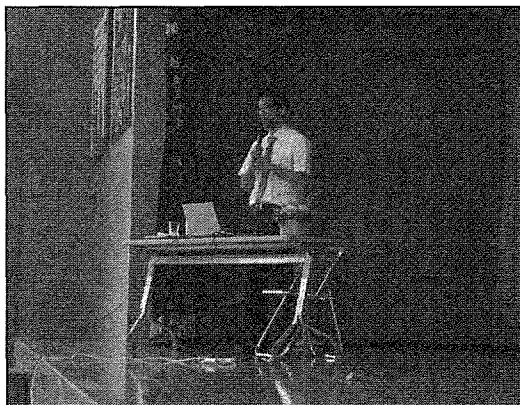
(2) 特別支援教育実践交流会の企画

○小学校、中学校、高等学校の各校種の取組みの事例発表をし、理解を広げる。

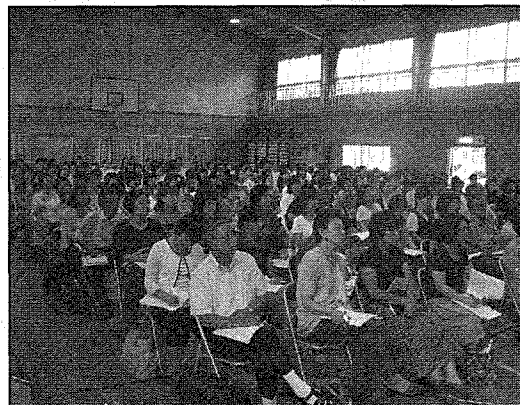
5 取組状況

(1) 特別支援教育セミナーについて

特別支援教育セミナー 平成 22 年 7 月 31 日 (土)		場 所	附属特別支援学校 体育館
講 師	大阪医科大学 LDセンター オプトメトリスト 奥村 智人 氏	参加者	250名
<p><講演題> 学びのつまずきにはわけがあった！ ～ 『見ること』が苦手な子どもたちへの理解と支援の実際～</p> <p>人は情報の80%を視覚から得ていると言われるが、視力がよくても「視機能」「視知覚」に問題があるために、読み書きやボール遊びなどの運動面でつまずきを抱える例が多くある。等</p> <p>視覚の問題を発見するチェックポイントや見る機能の発達を促す指導について説明をいただいた。</p> <p><つまずきの背景にある「見る力の問題」></p> <p>(1) 読み書きが苦手 (2) 算数の図形の問題が苦手、絵を描くのが苦手 (3) ボール運動が苦手 (4) 階段や遊具を怖がる</p> <p><視覚の問題に関するチェックポイント></p> <ul style="list-style-type: none"> ・目を細めて物を見る ・物を見るとき必要以上に顔を近づけたり、顔をかたむけたりする ・指さししたり、指示にしたりしたものをすばやく見つけられない ・手元をあまり見ずに遊んだり、作業したりする ・指先を使った細かい遊びや作業は好きではない 等 <p style="text-align: right;">奥村智人氏の資料より抜粋</p> <p>演習の中で、参加者が実際に視機能が弱いお子さんの状態を体験し、児童、生徒の困難さに気づく事ができた。</p>			



講演の様子



会場の様子

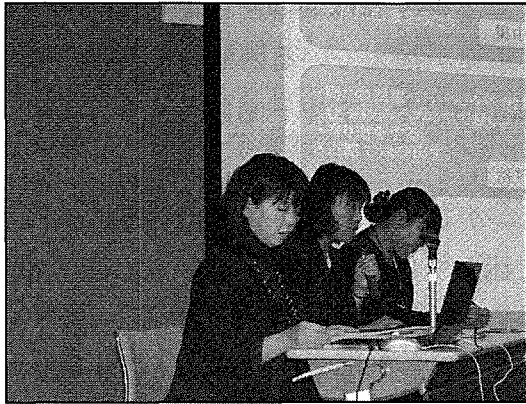
<参加者アンケートから>

- 見るということがいかに発達に関与し集中力、活動範囲に深く影響するかを考えさせられた。見やすい工夫、見たことを処理しやすい工夫の実践例も紹介され、今後の授業に取り入れたいと思う。
- 運動が苦手な子、単に筋力がないのではなく、視覚に問題があるということ、それが密接にかかわっているのだということが分かった。いろんなアプローチをしていけたらと思う。温かい目で。
- 子どもの外面からではつかみにくい、つまずきのつかみ方を、さっそく試してみたい。
- 疑似体験ができよかった。もっと支援策及び授業の進め方を吟味しなくてはならない。
- 音韻処理や眼球運動の特徴については今日初めて教えていただき、すごく驚いたし、子どもを見る目が変わりました。つまずきの要因は10人それぞれという言葉も耳に残った。
- 視覚、視知覚で困っている子どもたちの様子を体験しながら、講演を聞くことが出来てよかった。見る弱さに課題を感じていたので、とても参考になった。
- 担任が気づいている子と、あまり気にならず担任が気づかずにいる子がいる。見るのが苦手なために困っているから字が書けずにいた、文字が整わなかった。作業が遅い等、視覚によるものが多いことに気づいた。

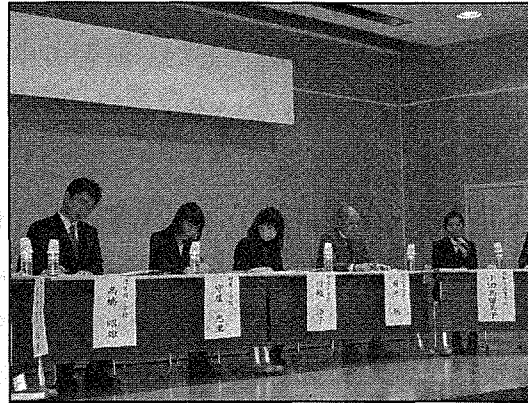
(2) 特別支援教育実践交流会について

特別支援教育実践交流会 平成 23 年 1 月 29 日 (土)		場 所	岩手大学 北桐ホール
事例発表者	内容	参加者	120名
沼宮内小学校 高橋 昭雄 教諭	「支援を要する児童との関わりを通して」 児童観察、学級経営、授業づくり、個別指導の4つの視点で児童、学級等を観察し、必要な支援を考え実践にいかした内容が発表された。		
附属小学校 川越 浩子 教諭 守屋 恵里 教諭	「附属小学校における支援の取り組み方」 コーディネーターからは、気になる児童の気づきから、支援に結びつけるまでの流れが発表された。 担任からは、1年K児の事例発表があった。校内、および特別支援学校コーディネーターとの連携、保護者との連携、具体的な支援・指導方法について発表があった。		
北上中学校 菊池 聡 教諭	「LD等通級指導教室の運営と指導事例について」 中学校LD等通級指導教室の紹介が報告された。また、対象生徒に対しての指導・支援、保護者との協力、通常学級での支援の実際が発表された。		

<p>西和賀高等学校 小田島 留美子 教諭</p>	<p>「西和賀高校における特別支援教育の現状」 入学する全生徒の中学時の情報収集、支援シートの作成、具体的指導（学習、生活習慣、心的支援、就労支援）3グレードに分けた学習支援等についての内容が発表され、生徒ができたことに対して、褒める、認めることを意識した実践が発表された。</p>
-------------------------------	---



事例発表の様子



シンポジウムの様子

<指定討論者からの助言>

○岩手県教育委員会学校教育室特別支援担当 佐藤 淳 主任指導主事

「その子の教育的ニーズについて校種を超え、長いスパンで一貫性をもって考えていくことが大事。幼保や小中学校であれば文書だけでなく、子どもの様子を目で見て情報交換し、支援のノウハウを引き継いでいくことが求められている」

○岩手大学教育学部 名古屋 恒彦 教授

「学校の通常の教育環境が安定し充実していると特別支援教育も充実していく。通常の教育活動の中にある教育力を見直し、精度を上げていくことが重要である」

<参加者アンケートから>

○通常学級がテーマの発表、シンポジウムはほとんどないので、とてもよかった。

○授業実践や日常実践に基づいたもので、現場教員がすぐに実践できる内容であったし、納得できることがたくさんあった。

○子どもが何で困っているかを知るといふこと、校内体制を確立することが大事だと思った。

○進級、進学にかかわって小→中、中→高などの連携を図ることの重要性を感じた。

○高等学校においてもサポートされている状況がわかり、小学校の通常学級においては更に研修をし、実践していかなければならないと強く感じました。

○小・中・高、各校における実践を聞くことができ、大変参考になりました。小学校の早

い段階から先々学習で苦戦することが予想される児童や保護者に対して、通級または入級という形で支援を受けられることを伝えていくことが大事だという思いを強くした。

6 考察

夏の特別支援教育セミナー、冬の特別支援教育実践交流会ともに参加者が多く、通常の学級の中で特別支援教育に関するニーズが高いことを改めて感じる。

今回の『見ること～』の研修を通して、『見る』ことが学習場面の中に様々な影響を及ぼしていることが分かった。また、演習の中で児童生徒が抱えている困難さを疑似体験したり、「はやく、まだできないの」といった声掛けによるプレッシャーも感じたりすることができた。

これまでは、問題行動がある児童生徒の相談にかかわるケースが多かったが、参加者のアンケート結果からも、学級の中で目立たないが、困っている児童生徒がいることを知り、教師が児童、生徒を観察する際の視点を増やすきっかけになったのではないかと感じる。

冬の実践交流会においては、各校種の実践を一堂に会して聞くことで、それぞれの学校での取り組みを知ることができた。また、その中で、各校種に求められることなども感じることができた会になったと考える。参加者のアンケートからは、通常の学級の中で実践できる支援が多く求められていることを感じるとともに、各校での取り組みについても聞きたいという要望が多かった。

課題としては、支援してきたことを校種間でどのように引き継ぐのか、校種間の連携がこれからの課題となってくるものと感じている。特に、高等学校での特別支援教育の必要性が大きく問題となり、幼稚園から就労までの一貫した支援が必要になってくることを強く感じている。

7 今後の展開

今後も、通常学級における学習場面での支援等についてのセミナーを行い、教員の専門性を高める機会を設定していく。

今年度の研修では、各校種の現状を知る機会となった。児童、生徒を観察する視点の一つを提案することができたと考える。この成果を踏まえ、来年度は、「わかる授業づくり」に関する内容の研修を計画し、通常学級の授業実践につながるような支援をしていく。また、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の通常の学級での取り組みの事例紹介を通して、意見交流をし、校種間連携につながるような内容での実践交流会を開催したい。

学部 GP 「22年度教育学部プロジェクト推進支援事業」実施要綱

22.4 運営会議

(1) 対象

教育学部・附属学校教員

(2) 目的

学部重点課題の推進を図る。現在、学部において求められている課題としては、「附属学校の活用に係る学部との連携のあり方」「学部における教員養成カリキュラムのより一層の充実」さらには、「24年度研究科改組に向けた教育実践に係る教育研究の推進」等があげられる。これらに係る研究をより一層推進するために、20・21年度学部 GP に引き続き、「22年度教育学部プロジェクト推進支援事業」を設ける。

支援期間は22年度の単年度とする。

(3) 対象とするプロジェクト

①学部と附属学校の連携に地域を取り込む等、附属学校の活用にかかわるプロジェクト

②教員養成カリキュラム開発プロジェクト

例えば、カンファレンス、模擬授業、体験学習、インターンシップ、学生派遣等の一層の充実と具体をすすめるプロジェクト、「教職実践演習」の実施に関するプロジェクト等を含む。

③研究科改組に向けて教育実践をキーワードとして位置づけるプロジェクト

例えば、教育実践専攻における「教職専門実地研究」のあり方、教科教育・教職・教科専門の協働による専攻のカリキュラム開発等に係るプロジェクトを含む。

④その他学部が抱える教育研究課題に関連するプロジェクト

(4) 支援期間

22年度の1年間

(5) 支援経費

- ・当該プロジェクト実施に必要な経費（設備備品費、消耗品費、旅費、謝金等）
- ・一件あたり原則として25万円以内（学部長裁量経費等による）

(6) 事業推進主体 運営会議（責任者 学部長）

(7) 応募

- ・プロジェクトの概要を別紙フォーマットに基づいて記入
- ・8～10件程度の採用を予定し、本事業の目的にそっていけば基本的に採用とする。但し、応募状況により運営会議で調整、審査を行うこともある。

(8) 申請締め切り 平成22年5月14日（金）学部運営グループ 篠村まで

(9) その他

- ・プロジェクト報告会の実施（平成23年2月頃）
- ・事業報告集の作成（平成23年3月予定）

平成22年度教育学部プロジェクト推進支援事業支援経費（予算）

（単位：千円）

No.	プロジェクト名	プロジェクト代表者	計
1	地域の歴史を対象にした歴史教育内容開発研究プロジェクト	今野日出晴	200
2	算数的・数学的活動を通して確かな学力を育むための授業づくりに関する実践的研究	山崎浩二	150
3	学部と附属学校の連携による算数・数学の授業改善	立花正男	150
4	科学的思考力を育成する物質学習の教育実践的研究	菊地洋一	200
5	「学校气象台」データを活用するための科学技術教育に関する教材開発 ～学部と附属小・中学校理科部との連携を通して～	名越利幸	200
6	学部と附属学校、地域との連携による体育の授業改善 ～「体力向上ハンドブック」を柱として～	清水茂幸	200
7	附属中学校における特別支援教育のあり方	塚野弘明	200
8	通常の学級における特別支援教育の理解と啓発に向けた推進支援事業 ～特別支援教育セミナー及び実践交流会の開催を通して～	宮崎 眞	200
合計			1,500

平成22年度岩手大学教育学部
プロジェクト推進支援事業

研究成果報告書

発行 岩手大学教育学部
教育学部・附属学校連携委員会

印刷所 (有)セーコー印刷
盛岡市下ノ橋町2-23
☎019 (651) 3606
